

## <前回：10. 解放の神学>

### (1) 解放の神学の概要

1. 科学技術と多元的社会というキーワード。二つの問題系。  
一つは「科学技術の神学」系であり、もう一つが「解放の神学」系である。

2. 「解放の神学」系：

「解放の神学」の発端は、ラテンアメリカにおいて「解放の神学」という名称をもって登場した実践的神学運動に見いだすことができる。それは、ローマ・カトリック教会の劇的な方針転換を示した第二ヴァティカン公会議(1962～65年)とも連動した神学動向であったが——グティエレス(『解放の神学』岩波書店)、ソブリノ、ポブラが名前を連ねる——、そのうねりは、少なくとも、1950年代後半のラテンアメリカ司教会議(リオデジャネイロ、1955年)やキリスト教基礎的共同体運動(1957年頃から)に遡る。

・政治的経済的な抑圧、格差、貧困。

当時のラテンアメリカを規定していたのは、軍事独裁と大土地所有を特徴とする強権的な政治経済体制であり、その背後にはアメリカ合衆国を中心とする列強の意向が存在。

3. こうした歴史的状況の中で「被抑圧状況におかれてきた民衆の解放を求める運動が高まり、その運動にキリスト者も参与」という仕方で生まれた神学潮流が、解放の神学・キリスト教には、「被抑圧状況におかれてきた民衆の解放を求める運動」に共鳴しそれを推進する動きが最初期から存在していた。イエスの宗教運動やパウロのエクレシア創設。

・1960年代に始まったラテンアメリカの解放の神学は、その後、1980年代にかけて、抑圧からの解放を希求するさまざまな問題領域へと世界各地で急速に広がって行く。

### (2) 「解放の神学」系とは何か

5. 社会的抑圧からの解放の希求が最初期のキリスト教にすでに確認できるのにもかかわらず、どうして、1960年代にことさらに「解放」の神学だったか。

・19世紀以降の西欧の近代社会において、キリスト教的救いのメッセージはしだいに個人主義化し、個人の内面の事柄に集中する傾向を示す。この動向は、本来の「救済/解放」(Salvation/Liberation)が内面の「救済」と社会的な「解放」へと分極化する。解放の神学が社会的経済的な抑圧からの解放を包括した人間の救いを「解放」として提起したのは、個人主義化した救済(→アヘンとしての宗教)へのアンチテーゼとして解釈できる。

・解放の神学：1960年代以降、特に目立つようになったさまざまな属格の神学——希望の神学、平和の神学、人権の神学、日本の神学……——を連想する人もいると思われるが、その理解はやや一面的。人間の「解放=救済」の問いというキリスト教神学の本来の事柄に関わる問題提起であって、決して、時流に乗った流行神学ではない。

6. 解放の神学が、ラテンアメリカの解放の神学を起点にして、その後世界各地の多様な文脈へと急速に展開していった。「解放=救済」への問いによって結ばれた、黒人神学、フェミニスト神学、民衆神学などをも包括した広範な神学動向を、「解放の神学」系と表現する。「解放の神学」系は現代神学の主要な潮流の一つ。

6. 現代の「解放の神学」系と、キリスト教史の中にさまざまな形態で確認できる「解放」の神学との違い：人間の解放がそこで問題となる現実世界は、伝統的に罪と規定されてきたが、近代以降、それは抑圧構造(エーリッヒ・フロムやティリッヒらに倣うならば、「破壊の構造」としてその複雑化の度合いを著しく高めている。

解放を神学的に論じるには、抑圧構造を批判的に解明する手段として社会科学的分析を欠くことができない。これは、現代の「解放の神学」系が直面している問題状況であり、ここに現代とそれ以前との相違が確認できる。

・「解放の神学」系にとって社会科学的分析は必要不可欠であり、マルクス主義がそのために用いられることがあったことは否定できない。しかし、それとイデオロギーとしての

マルクス主義の受容とはまったくの別の事柄。

### (3) フェミニスト神学とは何か、あるいは何であったのか

8. フェミニスト神学：近代キリスト教における女性運動と第二期フェミニズムとがアメリカで出会ったところに、自覚的に形成された神学運動、そこには、リューサーが繰り返し言及するように、ラテンアメリカの解放の神学との関わりも意識されていた。

9. キリスト教におけるフェミニズム。当初より、キリスト教の範囲を超える動き（キリスト教に見切りをつける）とキリスト教の内部にとどまる動き（狭義にはこれをフェミニスト神学）との緊張関係。前者には、ラディカル・フェミニストの代表と言えるメアリー・デイリーらが、そして後者にはリューサーらが含まれ、フェミニスト神学の紹介は双方の比較という仕方で行われることが少なくない。

10. フェミニスト神学の内部と外部にわたる論争の争点。

11. 伝統的なキリスト教に対するフェミニズムの批判の論点。

12. 以上の論点を対応するには、聖書解釈を基点にしつつも、神学全体に議論を広げてゆかざるを得ない。

↓

キリスト教思想史においてフェミニスト神学の可能性を探究するリューサー、聖書から宗教言語論（隠喩とモデル）へと展開するサリー・マクフェイグ、あるいは実践神学をフィールドの一つとするメアリー・マクリントク・フルカーソンら、20世紀の段階で、まさにフェミニスト神学は多様な方向に展開しつつあった。

13. 以上のフェミニスト神学者ら（第一世代のフェミニスト神学）にはほぼ共通する特徴。彼女らがアメリカの「中産階級、白人」を共通の文脈として、いずれも伝統的な教派（伝統的な神学的知）を背景としていること。

### (4) フェミニスト神学の諸動向——女性の経験から女性たちの多様な経験へ

13. 1990年代以降、フェミニスト神学は多様な文脈へと展開。従来の「女性の経験」から多様な「女性たちの諸経験」への発展。

・白人フェミニスト神学に続いて、アメリカ内部におけるアフリカ系、ヒスパニック系、アジア系のマイノリティの女性たちが、独自の発言を開始した。

・黒人女性の経験に基づいたウーマニスト神学（男性的性差別だけでなく白人女性の偏見をも批判する）とムヘリスタ神学（カトリック・ヒスパニック系）の登場。

・この流れはアメリカからラテンアメリカ、アフリカ、アジアへと広がってゆく（EATWOTのネットワーク）。ラテンアメリカの解放の神学における女性神学者（イボンネ・ゲバラら）、アフリカのウーマニスト神学者（マーシー・アンバ・オドゥヨイエら）、『再び太陽となる戦い』（1990年）で知られる韓国のフェミニスト神学者チョン・ヒョン・ギョンや香港のカク・プイランら、などなど。

14. フェミニスト神学の最近の動向を理解する上で重要なポイント。

フルカーソン／ブリッグス（2012年刊行の『フェミニスト神学のオックスフォード・ハンドブック』序論）。現代のグローバル化との緊密な関わりである。

フェミニスト神学の自己理解にも大きな変更を迫る。

たとえば、文脈の過剰な差異化は、「抑圧者と被抑圧者」というフェミニスト神学がしばしば用いてきた二元的な論理の限界を浮き彫りにする。ウーマニスト神学が白人女性の偏見を批判するとき、「女性＝非抑圧者」という図式は乗り越えられざるを得ない。また、文脈の過剰な差異化は、西欧近代の物語（近代以前だけでなく西欧外部における女性の戦いを消去してしまう）の脱中心化、あるいは近代という時代区分の再考を要求する。

## 11. 科学技術の神学

「この二〇世紀に科学／技術は驚異的な発展をとげ、私たちの生活を大きく変えた。それは一方で、文明の利器として、より多く、より速く、より安く、より楽に、をきわめて短期間に実現してきた。しかし他方で、核、宇宙、バイオテクノロジー、情報通信などの先端技術のシステムは、ひとり歩きの危険性をもち、人間のコントロールを逸脱しようとしている。さらに、それらの恩恵を享受できる国々（人々）とできない国々（人々）との格差は拡大し、また科学／技術が国境を越えるなかで、地球環境問題にも大きな影響を与えようとしている。」（編集委員による「まえがき」。『岩波講座 科学／技術と人間 1 問われる科学／技術』岩波書店、1999年、より）

「科学技術の神学」は、科学技術という人間の営みに関する神学的考察を意味しているが、含まれる問題は多岐にわたっている。この多岐にわたる諸問題を「科学技術の神学」系として総括する。

### （1）科学技術の現在

1. 科学技術の楽観論以降。20世紀末、1990年代頃から——1980年代以降における環境危機の世界的な共有化、1979年のスリーマイル島原発事故、1986年のチェルノブイリ原発事故などを受けて——科学技術のあり方に対する批判的な反省が目立つようになってきた。

科学技術の発展に対する素朴な期待感とそれに伴うバラ色の未来像：AI、脳科学、遺伝子工学をめぐる言説は別にして、基本的に過去のものとなった。

2. 政治経済の主導の下で進展してきた科学と技術の一体化（科学技術）＝国家的巨大プロジェクト（ネグリらの言う「帝国」）。こうした科学技術の動向は、近代を通じて徐々に進められたものであるが、20世紀半ばにはそれに気づいてきた思想家が存在していた。

3. ハンナ・アーレント：『人間の条件』1958年。

「一九五七年、人間が作った地球生まれのある物体が宇宙めがけて打ち上げられた。この物体は数週間、地球の周囲を廻った。・・・重要性から言えば、もう一つの出来事、核分裂にも劣らぬこの事件は、それをめぐる不愉快な軍事的・政治的背景さえなかったら、虚嘘いつわりのない喜びで歓迎されたことであろう。・・・むしろ、時の勢いにまかせて現れた反応は、『地球に縛りつけられている人間がようやく地球を脱出する第一歩』という信念であった。」（ハンナ・アーレント『人間の条件』ちくま学芸文庫）

4. 人類が地球に誕生以来、現在に至るまで「地球は人間の条件の本体そのもの」であり、現代科学は生命、人間存在そのものを、「自然の子供としてその仲間に結びつけている最後の絆を断ち切るために大いに努力しているのである」。

→ 宇宙開発や原子力などによる「人間の条件」の根本的な変容

5. 20世紀末の転換期における科学技術をめぐる問い、そして現代の問い。アーレントの議論の延長線上。環境危機、情報化、生命科学などに関わる科学技術の倫理性の問いであり、神学的問い。 → 人間存在の条件。これは、「第一級の政治的問題であり、したがって職業的科学家や職業的政治屋の解決に委ねることはできない」（同書）。

6. 「科学技術の神学」を問い上で参照。ベルナルド・スティグラー「技術の哲学」。  
・スティグラー：「技術の哲学」（「技術と時間」シリーズの第3巻目まで、法政大学出版局より邦訳出版）を展開中のフランスの哲学者。

古代ギリシャのエピメテウス神話に基づいて人間（＝「死すべきものたち」）を本質的特質を「欠如」した存在者と捉えた上で——ゲーレンの言う欠陥生物——、技術とは人間がその欠如にもかかわらず生存するために必要な人工物（人工器官）と説明。したがって、技術は人間にとって偶然的なものではなく、人間存在は技術によって構成され技術的存在と考えられねばならない。

7. 図形や文字は、記憶を世代から世代へと伝えるための技術であり、先行する世代の記憶を外在化、それを次の世代が内在化することを可能にする技術。現代の科学技術は、視覚と聴覚のアナログ的総合の技術（写真と蓄音機）を経て、デジタル化へと到達。

・「精神の歴史上の一大危機」：記憶技術が産業の管理下に置かれるプロセス。その完成の時代＝「記憶の産業化プロセスの時代」。記憶と意識が産業化と商品化のプロセスに全面的に組み込まれる時代。

## (2) 科学技術の神学とその意義

8. 科学技術はすぐれて現代的な問題であり、現代を論じることは科学技術を抜きには不可能。それは、「解放の神学」系との連関においても同様。「解放の神学」系における現代神学の動向は、人間の救いが具体的な社会的文脈における解放と不可分であるとの認識に基づいている。この「具体的な」という点を突き詰めて考えるとき、それには現代の科学技術の現実との関わりが潜む。

9. モルトマン：若い頃から「科学技術の神学」系の神学者でもあった。比較的新しい二つの邦訳書（いずれも新教出版社より刊行）、『科学と知恵——自然科学と神学の対話』（2007年）、『希望の倫理』（2016年）が示す通り。科学技術は現代の不安も希望も深く関与している。

・環境の神学が「解放の神学」系と「科学技術の神学」系に両方に属していること。現代の科学技術は、政治・経済の問題であり、政治・経済の状況は科学技術との密接な関わりの中にある。

↓

「解放の神学」系と「科学技術の神学」系という二つの問題系は、相互に結び付き、絡み合っている。

10. ステイグラーが、現代の科学技術を視覚と聴覚の総合技術（写真と蓄音機）のデジタル化として捉えていること。

視聴者である人間の意識と文化産業が提供する視聴覚メディアをシンクロさせ、その結果、本来は通約不可能でユニークな「私」と「われわれ」（たとえば民族）の差異が消滅し、すべてが「みんな」に解消されることになる。

・「みんな」「私」も「われわれ」も同一の視聴覚メディアを消費する「消費者」として同一化（＝「みんな」＝「完全に付和雷同する群れ社会」）。

このシンクロが可能になったのは、人間の意識の流れと視聴覚メディアとがいずれも「イメージの流れ」であるとい点で同質だからであり、この同質性は、デジタル化された視聴覚総合技術にとって極限まで高められている。

↓

本物とコピーとは見分けがつかないまでになっており、「人間のほとんどあらゆる経験が、感性・情動のかつ認知・情動的なコントロールに服従することになった」。

・「科学技術の神学」系のテーマである視聴覚の総合技術のデジタル化は、「私」と「われわれ」の産業的なコントロール（「みんな」化）という「解釈の神学」系のテーマと接続する。

11. 産業的なコントロール社会を特徴づけるのは、現代の資本主義社会が、従来の産業資本主義や金融資本主義から区別された文化資本主義あるいは認知資本主義と呼ばれる段階にいたったこと。

・認知資本主義やハイパーインダストリアル時代（情報的および文化的な内容を商品として生産する非物質的労働＝認知労働によって現代）。デジタル化された情報技術を介して人間＝労働者の生全体（労働も消費もすべて）に資本の支配がおよぶ。

### (3) 聖書の科学技術理解、その両義性

12. 「科学技術の神学」系を論じるには、科学・技術をキリスト教的神学的にいかにつまえるかが問題。「科学技術の神学」系についての議論の前提となる、「キリスト教的」な科学・技術理解を確認するために、聖書の創世物語から、科学・技術についての基本的見解を取り出す。問題になるのは、次の三つの聖書箇所である。

「神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。」(創世記1章27節)

「主なる神は、土(アダマ)の塵で人(アダム)を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。」(創世記2章7節)

「女を見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた。」(創世記3章6節)

↓

これらの三箇所(+それぞれの前後の文脈)から人間理解に関わるキーワードとして、①神の像/支配(創世記1章)、②土の塵/耕す/命名(創世記2章)、③墮罪(創世記3章)を取り出すことができる。

・①と②という二つのキーワード：人間存在の有限性とまとめることが可能——時間的な始まりは終わりを含意する——。その内、①は伝統的に「創造の善性」と解されてきたことからわかるように、人間存在の善性を意味するものと解釈し、②はその善性において成り立つ人間の行為と理解できる。

・「科学技術の神学」系という観点から。土を「耕す」(創世記2章15節)には「技術」へと現実化し、「命名」(創世記2章19節)には「科学」に発展する可能性が見出される。世界の事象に名を与え、世界の事象を変化させるこれらの行為は、まさに科学・技術の原型というべき営みであり、ここから、聖書の人間理解に従えば、科学・技術は人間にとって偶然的なものではなく、人間存在の本質に属するものであることがわかる。

人間は本来的には、耕す存在者、つまり「農民」であり、同時に命名する存在者、つまり、「科学者」なのである。そして、これらの人間の営みは、神の創造物が、神の目から見て、すべて善なるものであるということ——「神はお造りなされたすべてのものをご覧になった。見よ、それは極めて良かった」(創世記1章31節)——からの帰結。

・①と②に対して、③は善なる本質の歪曲=疎外を意味する→キリスト教思想における、人間存在を本質存在と実存存在という二つの規定によって論じる伝統(聖書の人間理解の哲学的解釈)。この人間理解は、キリスト教的思想の伝統をなしており、現代神学においても受け継がれている。

・ティリッヒ：この有限性と疎外(本質と実存)の二重性を、人間的生(=人間の現実存在)の両義性と解している。人間の行為を善と悪のいずれか一方にのみ還元することは不可能であり、本質と実存の混合体としての人間の生の現実においては、善なる面と悪なる面とは不可分に結びついている。人間存在の両義性からは、完全な善人も完全な悪人も存在しない。

13. 両義性は人間の営みである科学技術にも妥当。

原子爆弾は悪、原子力の平和利用である原発は善という議論は可能か。

i P S細胞などの遺伝子工学は、善と悪のどこに位置づけられるべきなのか。

14. 聖書の「都市」論。価値評価という点では両極端の例、一方の端にはソドムとゴモラのような悪しき都市が、他方の端には、エルサレムのような善なる都市。

・ヨハネ黙示録におけるバビロンと天のエルサレムとの対比。ほかの多くの都市はこの両端の間に位置しており、悪徳の町である同時に聖なる町という意味でまさに両義的。

・栗林輝夫「キリスト教は原発をどう考えるか——神学の視点から」（西原廉太、大宮有博編『栗林輝夫セレクション1 日本で神学する』新教出版社、2017年、所収）

「神学的に言えば、技術とは人類が墮落した後に過酷な環境で生き抜くため神から与えられた力」のことであることを確認した上で、聖書には二つの技術が描かれていることを論じている。一方に位置するのは「バベルの塔」であり、他方に位置するのは「ノアの箱舟」である。そして、人間が生み出し使用してきたさまざまな技術はこの両極の間に位置する両義的なものと言わねばならない。だから人間に求められるのは、生命のために「技術を見極める知恵」なのである。

15. スティグレールにおいて。

「近代技術の意味は両義的なのである。それは、思考の障害であると同時に究極の可能性として現れるのだ。」（ベルナルド・スティグレール『技術と時間1 エピメテウスの過失』法政大学出版局）

#### （4）遺伝子工学の衝撃と不安

15. ドリー誕生 1996年7月5日。「発表までずいぶんと時間がかかったのは、クローニングという技法で生まれたこの動物の生存可能性を見極めるためであったという。全世界を混迷に陥れたのは、不気味な光輪のようにドリーを囲む『クローン』という用語であった。」「ここで注目したいのは、一般世論がドリーについて示した反応の適切さの可否ではなく、むしろ人びとの『思考が停止した』という事実そのもの」である。（金承哲『神と遺伝子——遺伝子工学時代におけるキリスト教』教文館、2009年）

16. 生命をめぐる科学・技術の飛躍的進展によって大きな恩恵と不安がもたらされた時代。

クローン技術は思考停止と衝撃、そして道徳的不安をもたらした。遺伝子工学の進展は、多種多様な遺伝子治療（ヒトゲノム解析、ES細胞、iPS細胞などを用いた）へと道を開くことになった。

・20世紀末から現在まで、遺伝子工学をめぐるのは、キリスト教神学を含めた活発な論争・議論がなされてきた。何が問題なのかについて、少しずつ明らかになってきているが、日本における議論は必ずしも活発とは言えない。とくにキリスト教思想とその近接の研究分野において、議論は低調である。

17. 総合科学技術会議の生命倫理専門委員会「ヒト胚の取扱いに関する基本的考方」（2005年7月）という報告書。さまざまな問題点が指摘。

この報告書を取りまとめた生命倫理専門委員会のメンバーであった島菌進『いのちの始まりの生命倫理——受精卵・クローン胚の作成・利用は認められるか』（春秋社、2006年）。

「残念ながらその成立の経緯と内容はたいへん問題の多いものであった」と述べる通り。こうした状況の背後には、「価値次元の討論を避ける方向をとってきている日本」の現状が存在しており、これが脳死・臓器移植論争の以降の現実。

↓

求められるのが本格的な倫理的討論とそれに基づく社会的な合意形成。

前提となる批判的討論が困難であるところに、日本における問題の根深さがある。あるいは、現代日本の状況においては、遺伝子工学の衝撃が未だ十分に共有されていない。

#### （4）何が問題なのか？

18. クロー羊ドリーの登場以来、欧米を中心にキリスト教思想においても多く議論（金承哲『神と遺伝子』）。問題は、「人間の尊厳」や「神を演じる」が真の争点となりうるのか、なりうるであれば、いかなる意味においてか。これらの争点について、キリスト教思想の立場からどのような議論が可能か。日本の倫理学者と宗教学者の議論を参照。

19. 加藤尚武『脳死・クローン・遺伝子治療——バイオエシックスの練習問題』PHP新書、1997年)。

・クローン人間を作ることあるいは研究することが規制されるべきであるとされる論点について、「DNA同一＝身体同一か」、「身体同一＝人格同一か」、「そっくり人間の存在は人格の尊厳侵害か」という順序で検討。

・「人間の尊厳」という争点について。加藤の結論。「クローン人間作りを人格の尊厳を侵害する行為とみなすことには無理がある」。

キリスト教思想に課せられるべき課題は、キリスト教的立場から人格概念を明確に規定すること。

・遺伝子操作によって優れた子ども生み出そうとするデザイナーベイビーに典型的に見られる問題、つまり、子どもを親の幸福追求の手段とする問題。

加藤：「生命についての知の根本的な変質」、これまでブラックボックスの中におかれていた生命の営みが技術的操作の対象となることにとって、いわば人間の内的自然の技術化は新しい段階に到達する。ヒトゲノム解析。

これは、「神を演じる」という争点の核心。問われているのは「人間の条件」を人間自身が変更することの是非であり、人類はこれに伴う重荷に耐えうるか責任を果たしうるのか。

加藤：『人間らしさ』を守ることは、人間の中の自然を守ることである。人間を自然らしさを設計することである。」

20. 島菌進「生命科学のグローバルな競争と国際規制——iPS細胞の福音と生命倫理の新たな課題」(『福音と世界』2013. 1。遺伝子工学の進展を正当化する言説の高まりにいわば抗しつつ、iPS細胞の道徳的問題について批判的な考察を行っている。

不妊治療に適用される遺伝子治療が「治療を超えた」欲望達成の手段となりかねないこと、人のいのちの道具化、資源化につながりかねないこと、またそこには、「人間がもはや人間ではなくなるかもしれないという『危機』が存在すること。

・遺伝子工学の実用化は国際的合意形成を必要とする。

遺伝子工学は国民国家の境界を越えたグローバルな問題として存在しており、「人類のあり方そのものを変えてしまうような科学技術のある国が認めてしまえば、他の国が禁止しても止められない」。

しかし、科学者は最初に成功者となる誘惑・欲望に弱い。一つの国の中での合意形成ですらままならない人類が、どうして国際的合意など達成できるだろうか。

・カトリック教会をはじめとしたキリスト教の立場の論者が、ES細胞の利用が胚の破壊である点で道徳的に是認できないと主張することに対して——iPS細胞の方は倫理的問題が小さい——、「それは胎児の人工中絶の問題に深くこだわってきた西洋のキリスト教の価値観に引きずられた見方ではないだろうか」と指摘。

↓

「宗教的な背景について自覚的に、宗教的な伝統がもつ強味を多様な現代社会にふさわしい形で生かしていくような学術のあり方が求められている」との島菌の指摘。

### (5) 自然とは何か？

遺伝子工学については、「神を演じる」ことや自然の人為的改変(つまり不自然)に対する根強い批判が存在するが、これは、キリスト教思想における古典的な問題とも無関係ではない。

21. 「神を演じる」ことをめぐる問題。

「神を演じる」とは「科学者たちの境界侵害(transgression)について警句」、「ある科学

的研究や医学的行為を道徳的に中止される」意図。その意味は多義的であり、必ずしも明確ではない。

22. 加藤尚武は、「神を演じる」を次のように分析。

「①人間そのもの、人間の遺伝的構造について、あるいは自然界の生命のあり方について、②学者とか、医療関係者とか、生命工学で利益を上げようとしている資本家たちとか特定の人々が、③一方的に他の人々の運命まで巻き添えにして、④一面的な判断や短期的な利害意識に基づいて、⑤不可逆的な、永続的な影響を及ぼす決定を下すこと。」(『脳死・クローン・遺伝子治療——バイオエシックスの練習問題』)

23. 「自然らしさ＝善、人為＝悪」といった自然主義的立場。しかし、自然自体が可変的なものであり——進化論を認めるか否かに関わらず——、人類が古代の昔から自然の改変を行って現在に至っていることは否定しがたい事実。人為的な介入がすべて直ちに悪であると言えるほど、現実には単純ではない。

24. 遺伝子工学への反対派と推進派の中間に位置する慎重派・穏健派の議論。

・フィリップ・ヘフナーの「創造された共同創造者」という人間理解を用いて、自らの「遺伝子工学の神学」を提唱しているコール＝ターナー。

人間は被造物であるが、同時に神の創造行為（継続的創造）に参加する共同創造者であり、遺伝子工学による自然の改変は神の創造行為に属している。

「もし私たちが創造的・救済的に働くようにに神によって招かれた存在であると自らを認識するならば、私たちはテクノロジー、特に遺伝子工学を、自然の拡大と救いという働きにおける神の同伴者（partnership）として把握することができるのである。」(金承哲『神と遺伝子』)

25. 賀川豊彦。

「もしも私たちが神に帰依して、手足を動かすことを拒み、それでいて神は私たちを助けて下さるだろうと信じているとすれば、それは迷信以外の何ものでもない。結局のところ、信仰とは神による可能性を信じることである。この可能性を信じることでそれが人間の活動を要求する。」「私たちが私たち自身をとおして神に働いてもらうようにするのだから、神ご自身もその可能性を実現することはできない。」(賀川豊彦『友愛の政治経済学』仁保生活協同組合連合会、2009年)

26. 神の創造行為あるいは摂理と人間の自由意志との関係。ここに罪論が交差することによって、多様な神学的立場を帰結する。

賀川の立場：神の愛は人間の自由意識を通して溢れ出てその目的をこの世界に実現するものである。この立場に立てば、「神を演じよう」(フレッチャー)とはいかないまでも、神の愛の実現の場となるという意味で「神を演じる」ことは十分に可能。遺伝子工学という人間の活動に対して、神の愛が働く場としての機能を認めることは不可能ではない。

27. 遺伝子工学（再生医療や創薬研究）によって、さまざまな疾病の治療が期待。山中伸弥監修 京都大学 i P S 細胞研究所『i P S 細胞が医療をここまで変える——実用化への熾烈な世界競争』PHP新書、2016年。

## (6) 人間とは何か？

28. 遺伝子工学を利用して優秀な子どもをデザインする可能性。優生学との関わりを含めて、欲望充足のための人間の道具化・手段化という論点。

・子どもに優秀になって欲しいとの親の願いを全否定するような単純な議論が成り立たないことに留意しつつ(先の加藤尚武の著書などを参照)、問題を掘りさげる必要がある。

・遺伝子工学が「人間の条件」に大きな変更を加えることによって、基本的人権を有する

人間の平等性が否定されるのではないかという論点。

ユルゲン・ハーバーマス『人間の将来とバイオエシックス』（法政大学出版局、2004年）。

遺伝子工学が引き起こす事態に対する嫌悪感・嘔吐感、めまいの感覚の意味の明確化をめざして、人間の尊厳、道徳と倫理の関わり、リベラルな優生学の問題性、教育と遺伝子工学との類比と差異などを論じている。着床前診断に対する疑惑として、次のように述べている。

「胚の選別は、遺伝子治療にもとづく介入措置の場合と同じく、治療される人格の側からの賛成は本人の見解は得られるとしても後からしかたしかめることができない以上、前もって前提できないのであるから——そもそもここでは人格が生じないのであるから——どうしても一方的であり、したがって道具的なものとならざるを得ない。」

↓

平等性などの人間の条件が変わるとすれば、人類はいかにして人間であるあり続け得るのか。

29. ハーバーマスの考えも批判的に検討した上で、考察を行っているマイケル・サンデルの議論（マイケル・J・サンデル『完全な人間を目指さなくてもよい理由——遺伝子操作とエンハンスメントの倫理』ナカシニヤ出版、2010年）。

遺伝子工学（たとえばデザイナーベビー）をめぐっては、どこまでが治療でどこからが改良・増強（エンハンスメント）かというやっかいな問題が存在するが、サンデルは、具体的な事例を検討しつつ、問題点を次のように取り出している。

「被贈与性の倫理はスポーツでは落城の危機に瀕しているものの、子育てという営みの中では今なお命脈を保っている。だが被贈与性の倫理はここでもまた生物工学や遺伝子増強によって追放されるという脅威に見舞われている。子どもを贈られたもの(gift)として理解することは、子どもをあるがままに受けとめるということであり、われわれの設計の対象、意志の産物、野心のための道具として受け入れることではない。」

30. 子どもの予測不可能な性質を受け入れる態度。サンデルは、神学者ウィリアム・F・メイ(William E. May)の「招かれざるものへの寛大さ」(openness to the unbidden)を参照。

・被贈与性への感覚こそが、支配の衝動の歯止めとなる謙虚さの源泉であり、「いのち」とはまさに神の贈与であるとの理解は、キリスト教の土台（「部分的には、宗教的感性」）。遺伝子工学の時代において、キリスト教思想がさまざまな思想と共有すべきもの。被贈与性は宗教だけのものではなく、「世俗的な言葉で表現することもできる」。島菌の言う「宗教的背景について自覚的に、宗教的な伝統がもつ強味を多元的な現代社会にふさわしい形で生かしていくような学術のあり方」はここにその可能性が確認できる。

### <参考文献・注>

1. 1990年代の問題意識は、次のシリーズと著作に現れている。これらがすべて同年の刊行であることは偶然の一致だろうか。

『岩波講座 科学／技術と人間』（全十一巻＋別巻）岩波書店、1999年。

加藤尚武・松山壽一編『科学技術のゆくえ』ミネルヴァ書房、1999年。

富坂キリスト教センター編『科学技術とキリスト教』新教出版社、1999年。

2. ベルナル・スティグレルの議論については、主に『象徴の貧困——1 ハイパーインダストリアル時代』、『愛するということ——「自分」を、そして「われわれ」を』、『偶有からの哲学——技術と記憶と意識の話』（いずれも新評論から出版）が参照された。なお、スティグレルの議論の全体を把握するには『偶有からの哲学』が便利であろう。

3. 芦名定道「科学技術の神学にむけて——現代キリスト教思想の文脈より」（日本宗教

学会『宗教研究』第 87 巻、377-2、2013 年、31-53 頁)。

4. 積極的な発言を行っているのは、カトリック神学。たとえば、『いのちの福音』(教皇ヨハネ・パウロ二世回勅)などを基本としたカトリック教会の議論は、秋葉悦子訳『ヴァチカン・アカデミーの生命倫理——ヒト胚の尊厳をめぐって』(知泉書館、2005 年)に明確に示されている。

5. 科学と宗教との関係をめぐる専門雑誌『ザイゴン』(*Zaygon. Journal of RELIGION & SCIENCE*)では、この 10 年、イスラムに関わる論文が目立つようになってきており、問題がキリスト教や西欧に限定されないこと示している。